



北海道からのメッセージ

島山 武道

3月初旬、船橋漁港からモーターボートで東京湾にでた。すぐに左手に船橋市自慢の巨大ショッピングセンター「ららぽーと」がみえる。右に旋回し、正面に蟹気楼のようにうかぶ浦安高層アパート群をめざしてボートはスピードをあげる。沖合から2キロ位の海洋の真ん中でボートが停止した。まわりには、無数の竹の棒が整然と打ち込まれている。あいにくの高潮でよく見えないが、この下に大きな干潟があるという。竹の棒はノリ網の支柱であった。

東京湾にわずかに残された干潟の中でもっとも奥にある大きな干潟・三番瀬が埋立てられようとしている。埋立地の合計は740ヘクタールという巨大なもので、港湾施設、ふ頭、レクリエーション施設、公園、住宅、下水道処理施設、それに人工海浜まで予定されている。近くには、バブルに踊って作られた幕張副都心用地が売れずに残っているのに、千葉県や運輸省は計画をやめようとししない。しかし、地元で反対運動をしている漁師や市民の方は意気軒高で、若い人が多く、羨ましく思うと同時に、たいへん元気づけられた。

北海道にいとよく分からないが、ムツゴロウで有名な諫早湾のほかに、名古屋市の藤前干潟、福岡市の和白干潟沖などで、高度成長時代の遺物ともいえるべき巨大埋立て計画が進行中である。干潟は生命のゆりかごといわれるように生物が豊富なところであり、自然生態系の中ではたしている役割には測りしれないものがある。しかし、戦後の経済成長のなかで、無用な土地、役にたたない土地として、簡単に港湾施設や工場用地に作り替えられてしまった。われわれは自らの繁栄や欲望のために、何万・何十万という生命を犠牲にしてきたというべきであろう。

しかも重要なことは、こうした巨大埋立てが、本当に地域を潤したかどうかとも疑わしいことである。埋立事業による工場誘致は、一部の地域をのぞきほとんど失敗した。広大な埋立地が売れないままに放置され、建設会社だけが潤った。さらに埋立てによって海水浴や潮干狩りのできる自然海岸も大きく減少した。日本の海岸線は世界一長いともいわれるが、海水浴や潮干狩りのできる自然海岸（岩石海岸などは除く）は、その1割にも満たないだろう。われわれの世代は、先の世代から受けついで貴重な自然海岸や干潟を金に換え、後の世代の海に立ち入る権利を奪ってしまったのである。

幸いなことに、北海道には巨大な埋立計画はない。しかし、大規模工業地帯、大規模農業、大規模酪農、大規模林業、大規模リゾートなど、「大きいことは良いことだ」を旗印に巨大化の夢を先頭になって追ってきたのが北海道である。そのため、為政者や経済界は、補助金漬けの公共事業にひたまりきり、第一次産業や技術、教育、文化などへの地道な投資を怠った。そのつけを、われわれ（および後）の世代は今負わされようとしているのである。身内の恥を外にさらすのは楽しいことではない。しかし、相も変わらぬ巨大公共事業が続く以上、われわれは全国にむかって自らの体験を話さなければならない。

こうした状況の中で、本号には北海道の自然保護と公共事業のありかたを住民・市民の立場から鋭く検討した力のこもった論稿を収録することができた。今後は、本誌が全国で同じ問題に直面している住民・市民の皆さんにさらに広く読まれるための努力をしたいと思う。

はたけやま・たけみち

1944年旭川市生まれ。1989年から北海道大学教授。94年から本協会副会長。専攻は行政法学。「アメリカの環境保護法」「環境行政判例の総合的研究」（いずれも北大図書刊行会）などの著書がある。